

保育者の信頼感尺度の作成

— 幼稚園教諭と保育士別の専門性との関連 —

渡邊 賢二（皇學館大学教育学部）

矢田 実優（四日市市立内部保育所）

〈要旨〉本研究は、保護者が考える保育者の信頼感尺度を作成し、保育者の信頼感尺度を幼稚園教諭と保育士で比較検討した。また、保育者の専門性と信頼感との関連を検討した。まず、保育者の信頼感の項目を得るために、自由記述を行い、KJ法により分析した。その後、因子分析をした結果、「専門知識」、「子どもへの愛情・楽しみ」、「誠実性」、「子どもの観察」の4因子を見出すことができた。次に、保育者の信頼感の4下位尺度について、幼稚園教諭と保育士で比較した結果、「専門知識」、「誠実性」、「子どもの観察」では、保育士より幼稚園教諭の方が有意に高い得点を示した。次に、保育者の専門性が信頼感を予測するのか検討した結果、幼稚園教諭と保育士ともに、「子ども分析」は「専門知識」、「子どもへの愛情・楽しみ」、「子どもの観察」を予測し、保育士のみ、「自己注意」は「専門知識」、「子どもへの愛情・楽しみ」を、「子ども察知」は「専門知識」、「子どもへの愛情・楽しみ」、「誠実性」、「子どもの観察」を予測した。

〈キーワード〉 保育者の信頼感 保育者の専門性 幼稚園教諭 保育士

【問題・目的】

教育現場では、不登校、いじめ、学級崩壊などの学校不適応が社会的な問題として取り上げられるようになってから久しい。小学校や中学校では、児童生徒の学校不適応への対処の一つとして、授業を主に、多様な関わりをもつ教師の役割が改めて指摘され（石隈，1999；大野，1997など）、教師と児童生徒、また教師と児童生徒の関係についての研究が行われてきている（飯田，2002；小林・仲田，1997など）。教育現場での児童生徒の心理的な健康を考えると、児童生徒の教師に対する信頼感が重要であり、この信頼感に関する研究が行われている（中井・庄司，2006など）。また、「重要な他者」との間には、基本的信頼感が形成されており、多様な問題やストレス状況に置かれても、健全な日常生活や学校生活を送ることができることも報告されている（酒井・菅原・真榮城・菅原・北村，2002）。すなわち、児童生徒が日常生活や学校生活を適応的に送っていく上では、児童生徒の教師に対する信頼感は非常に重要であると考えられる。

これまでの児童生徒の教師に対する信頼感に関する研究について述べる。中学生の教師に対する信頼感の研究において、中井・庄司（2006）は生徒の教師に対する信頼感尺度を作成し、信頼感を教師がいることによる「安心感」、教師に対する「不信」、生徒が教職という職業についている教師に対して期待しているという「正当性」の3側面から捉えている。その後、この尺度を用いて、教師に対する信頼感と学校適応感との関連を検討し、信頼感は「学習意欲」、「進路意識」、「規則への態度」、「特別活動への態度」に影響を及ぼすことを明らかにしている（中井・庄司，2008）。また生徒の教師に対する信頼感の規定要因として、教師側の信頼性だけでなく、「生徒の過去の教師との関わり経験」や「生徒が認知する保護者の教師に対する信頼感」という生徒側の要因も影響することを述べている（中井・庄司，2009）。また、前田・佐久間・新見（2008）は、中井・庄司（2006）の研究結果を踏まえて、教師に対する信頼感と友人に対する信頼感はこちらの方が学校適応感と関連が強いのかを検討した結果、教師に対する信頼感の方が、学校適応感と関連が強いことを報告している。

次に、小学生の教師に対する信頼感の研究について述べる。村上・坂口・櫻井（2012）は、教師に対する信頼感を「小学生が担任教師に対して一方的に感じている、信じ得ることができるという主観的判断とそれに基づく担任教師が自分を幸福にするような行動をしてくれるであろうという期待」と定義し、担任教師に対する信頼感尺度5項目を作成し、信頼性と妥当性を検討している。また、5年生と6年生より4年生の方が担任教師に対する信頼感が高いことを明らかにしている。

学級担任制をとる小学校と教科担任制をとる中学校では、教師の児童生徒に対する影響力は小学校の方が大きいと考えられ、小学生にとっての教師の役割の重要性が指摘されている（佐藤・服部，1993）。また、信頼感は発達に伴い変化するものであり、思春期はちょうど信頼感の再獲得の時期であると言われている（天貝，2001）。さらに、中学生以降の教師に対する信頼感への移行期、また信頼感の発達という観点からも小学生の教師に対する信頼感を検討することは大切であると指摘されている（村上・坂口・櫻井，2012）。これらより、子どもが教師を信頼することができるという経験を持つことは、発達や適応感においても重要であると言えよう。

子どもは信頼できる教師をいつ頃から認識することが可能か。天貝（1999）は幼稚園児を対象に面接調査を実施し、年少期では「信頼できる人」の理解が、年中期から年長期にかけて「信頼できない人」の理解が発達していくことを指摘している。これらのことから、子どもが最初に出会う教師である保育者に対する信頼感は、小学校以降に出会う教師への信頼感にも影響を及ぼすだろう（中井・庄司，2009）。また、幼稚園教育要領では、「教師は幼児との信頼関係を十分に築き、幼児と共によりよい教育環境を創造するように努めるものとする」、保育所保育指針においても、「一人一人の子どもの気持ちを受容し、共感しながら、子どもとの継続的な信頼関係を築いていく」、「保育士等との信頼関係を基盤に、一人一人の子どもが主体的に活動し、自発性や探索意欲などを高めるとともに、自分への自信を持つことができるように成長の過程を見守り、適切に働きかける」ことが記されている。これらの点を考慮すると、幼稚園や保育所で働く保育者にとっても、子どもとの信頼関係を構築することは重

要であり、幼児の教師（以下保育者とする）に対する信頼感も検討する必要があるだろう。

これまで、保育者の信頼感に関する研究として、岡本（2015）は信頼感は目に見えないが、幼児の姿のなかに表れており、保育者が感じる子どもとの信頼感について注目する必要があると述べ、幼稚園教諭と保育士に面接調査を行い、保育者の視点から子どもとの信頼感について、「受容・共感」、「信じる」、また「保育者による多様な関わり」を、保育者がとらえる子どもとの信頼感であると報告している。榎本（2013）は、幼稚園に子どもをあずける保護者からメッセージカードを記述してもらい、その中から保育者に対する信頼感の記述を抜き出し、KJ法によって分析している。その結果、信頼感とは「幼稚園が楽しいという子どもの様子」、「教師が子どもに温かい関心を寄せている様子」であったと述べている。岡本（2015）の研究は、保育者が感じる子どもとの信頼感を、榎本（2013）の研究は、保護者のメッセージカードから子どもとの信頼感について検討している。幼児期の子どもと最も関わりがあるのは保護者であり、幼稚園や保育所に子どもをあずける保護者は保育者とコミュニケーションをとる機会が多く、保育者をよく観察していることが推察される。これらより、保護者からみた保育者の信頼感という視点は重要であると思われる。

以上のように、中学生と小学生の教師に対する信頼感についての実証的な研究は、進められてきているが、保護者が考える保育者の信頼感に関する実証的な研究はあまりなされていない。そこで、本研究では、保育者の信頼感について検討する。第一に、保護者が考える保育者の信頼感尺度を作成する。保育者がどの程度、子どもと信頼感を築く行動をとっているか検討する。第二に、幼稚園教諭と保育士は、教育と保育の相違というように、園での教育や保育の内容も、また子どもとの関わりも相違があると考えられる。また、渡邊・青山（2018）は保育者の専門性とストレスについて、幼稚園教諭と保育士を比較した結果、保育者の専門性は保育士より幼稚園教諭の方が、ストレスは幼稚園教諭より保育士の方が高かったことを報告している。これらより、保育者の信頼感も相違があることが考えられるため、幼稚園教諭と保育士を比較検討する。第三に、村上・鈴木・坂口・櫻井（2013）は小学生の担任教師に対する信頼感

と担任教師の行動・態度との関連について検討し、信頼できる教師の行動・態度について、専門性、熱意、面白さ、明朗性、身近さ、親しみやすさ、叱りの適切さ、敏感性、受容、安心、誠実性、正当性の12カテゴリーを見出している。小学生を対象とした研究とは相違があると思われるが、本研究においては、保育者の信頼感の規定要因として、保育者の専門性との関連を検討する。

【予備調査】

1. 保護者が考える保育者に対する信頼感尺度を測定する項目の収集

幼稚園や保育所に子どもをあずける保護者55名（女39名、男16名）を対象として、「保育者に信頼を抱く言動はどのようなものか」について自由記述による調査を行った。得られた記述回答を心理学者、第二著者、幼児教育を専攻する学生2名の計4名でKJ法にて分類し検討した。その結果、保護者への連絡や子育て支援・相談を示す項目内容により「保護者との関わり・連携（5項目）」、子どもの様子に関心を示し、観察・コミュニケーションを用いて子どもに対する理解を深める項目内容により「子ども理解・観察（6項目）」、自分自身の性格や態度・まじめさなどを示す項目内容により「人間性（7項目）」、保育を行う上で子どもの発達段階や環境整備、適切な対処など、専門知識を基に行うことを示す項目内容により「専門知識（6項目）」、子どもが好きでやりがいを持って保育を行っていることを示す項目内容により「意欲（6項目）」と命名し、30項目が採用された。

【方 法】

1. 調査対象者：A市の公立幼稚園・保育所で勤務する幼稚園教員46名・保育士155名
2. 調査時期：2017年9月
3. 手続き：S市の公立幼稚園・保育所に質問紙を送付し、各幼稚園・保育所で回答を実施し、その後回収した。
4. 質問紙の構成：
 - （1）基本的属性：所属名・性別を尋ねた。

（２）保護者が考える保育者の信頼感尺度：予備調査で作成した保護者が考える保育者の信頼感尺度の30項目を「１あてはまらない」～「５あてはまる」の５段階評価（１点～５点）で回答を求めた。

（３）保育者の専門性尺度：保育者の専門性を測定するために、杉村・朴・若林（2009）が作成した保育における省察尺度22項目を用いた。「１：まれに」～「５：いつも」の５段階評価（１点～５点）で回答を求めた。保育者自身に関する省察に関する尺度である。比較的短期および長期の自己の保育に関する項目である自己考慮６項目、実践中の自己の態度や言動に対する注意や意識についての項目である自己注意５項目、比較的短期および長期の子どもの発達に関する分析的な項目である子ども分析７項目、実践中の子どもの行動や態度に対する注意や予想についての項目である子ども察知４項目、他者との会話や他者の保育の観察に利用する項目である他者情報利用６項目、他のクラスの子どもや他の保育者の様子に注意を向けたり見たりする項目である他者情報収集５項目から構成されている。本研究では、自己考慮、自己注意、子ども分析、子ども察知の22項目を用いた。得点が高いほど、専門性が高いことを示す。

【結 果】

１．保育者の信頼感尺度の因子分析

予備調査で得た保育者の信頼感尺度の30項目に対して、重みなし最小二乗法・Promax回転による因子分析を行った。固有値の変化（10.33, 2.06, 1.27, 1.10, 0.90…）と解釈の可能性より、４因子構造が妥当であると考えられた。そこで、４因子を仮定して、重みなし最小二乗法・Promax回転による因子分析を行った。因子負荷量の.40以下の６項目を除外した。残りの24項目を再度重みなし最小二乗法・Promax回転による因子分析を行った。Promax回転後の最終的な因子パターンと因子間相関をTable1に示す。なお、回転前の４因子で24項目の全分散を説明する割合は61.45%であった。第１因子は「一人ひとりの子どもの特性に応じた保育内容を考えている」「子どもの発達段階に合わせ、保育室の環境整備をしている」など、保育者の専門知識の項目内容10項目から構成されていることから、「専門知識」と命名した。第２因子は「幼稚

園・保育園で子どもたちと一緒に遊んでいる」「子どもに愛情をもって接している」など、子どもに対する愛情や子どもと接することの楽しみの項目内容6項目から構成されていることから、「子どもへの愛情・楽しみ」と命名した。第3因子は「人の悪口や嫌味、うわさ話をしていない」「保護者にいつも誠実な態度で接している」など、保育者の誠実な態度の項目内容4項目から構成されていることから、「誠実性」と命名した。第4因子は「子どもの小さな変化に気づくことができる」「園での子どもの様子をよく観察している」など、子どもの行動を観察している項目内容4項目から構成されていることから、「子どもの観察」と命名した。

次に、各因子の平均値（SD）と信頼性係数（ α 係数）を算出した。専門知識の平均値（SD）は4.13(.53), $\alpha = .90$, 子どもへの愛情・楽しみは4.55(.53), $\alpha = .85$, 誠実性は4.27(.60), $\alpha = .78$, 子どもの観察は4.15(.54), $\alpha = .80$ であった。内的整合性が確認された。

最後に、保育者の信頼感尺度の確認的因子分析を行った。モデル適合度は、 $\chi^2=226.030$, $df=213$, GFI= .919, AGFI= .886, CFI= .995, RMSEA= .017であった。AGFIは.900を下回ったが、適合した結果が得られた。

2. 保育者の信頼感尺度の幼稚園教諭と保育士の比較

保育者の信頼感尺度の下位尺度である「専門知識」, 「子どもへの愛情・楽しみ」, 「誠実性」, 「子どもの観察」について、幼稚園教諭と保育士の差異を検討するために t 検定を行った (Table 2)。その結果, 「専門知識」, 「誠実性」, 「子どもの観察」については、保育士より幼稚園教諭の方が有意に高い得点を示した。

保育者の信頼感尺度の作成（渡邊・矢田）

Table 1 保育者の信頼感尺度の因子分析

項目内容	I	II	III	IV	共通性	平均値	SD
I. 専門知識							
7. 一人ひとりの子どもの特性に応じた保育内容を考えている	.91	-.07	-.09	-.01	.69	4.07	.75
6. 保育者として子どもの発達についての専門知識がある	.77	-.03	-.03	.02	.56	3.97	.71
8. 子どもの発達段階に合わせ、保育室の環境整備をしている	.76	.00	-.05	.03	.57	4.03	.75
4. 子どもに注意をしたり、褒めたりするなど、メリハリをつけている	.60	.23	-.15	.05	.54	4.42	.70
15. 保護者の立場にたって、保護者の話や子育てに対する悩みの相談にのっている	.57	-.21	.09	.33	.56	3.99	.79
20. 子どもに分かりやすい言葉で話している	.55	.21	.14	-.14	.47	4.38	.74
5. 子ども間でトラブルがおきたときは両者の立場に立ち適切な対処を行っている	.49	-.08	.18	.31	.63	4.43	.67
3. 子どもが悪いことをした時は、叱りつけるのではなく、何が悪かったのかを子どもに理解できるように話している	.49	.16	-.02	.16	.51	4.46	.69
21. 連絡ノートを書くときは漢字を交えた丁寧な字、文章を書いている	.47	.39	.02	-.22	.41	4.21	.82
18. 他の保育者から信頼されている	.40	-.05	.25	.07	.33	3.39	.69
II. 子どもへの愛情・楽しみ							
28. 幼稚園・保育園で子どもたちと一緒に楽しく遊んでいる	-.15	.85	-.07	.05	.58	4.46	.78
12. 子どもに愛情をもって接している	.00	.63	.09	.08	.56	4.78	.53
29. 保育をすることが楽しいと感じている	.20	.63	.05	-.19	.46	4.28	.83
22. 子どもの成長・発達を保護者とともに喜んでいる	.01	.61	.10	.18	.67	4.65	.65
11. 子どもと話す時は、子どもと同じ目線で話している	-.03	.57	.05	.19	.52	4.54	.70
1. 連絡事項だけでなく、園での子どもの様子を保護者に伝えている	.23	.50	-.29	.21	.47	4.59	.67
III. 誠実性							
23. 人の悪口や嫌味、うわさ話をしていない	-.12	-.11	.79	.00	.47	3.94	.96
25. 保護者にいつも誠実な態度で接する	.01	.30	.59	-.01	.67	4.52	.63
19. 一人ひとりの子どもやその親に対して態度を変えていない	.12	-.08	.59	.11	.44	4.23	.79
24. 保護者や子どもと接するとき、常に笑顔である。	-.04	.36	.55	-.06	.58	4.41	.71
III. 子どもの観察							
14. 子どもの小さな変化に気づくことができる	.18	-.04	-.01	.71	.67	4.03	.66
13. 園での子どもの様子をよく観察している	-.02	.16	.05	.71	.69	4.33	.65
10. 一人ひとりの子どもの良いところを見つけることができる	-.05	.29	-.01	.61	.61	4.44	.66
2. 子どもの良いところ悪いところ隠さずに保護者に伝えている	.12	-.05	.01	.45	.27	3.75	.74
	I	II	III	IV			
I	-	.62	.43	.69			
II		-	.62	.65			
III			-	.53			
IV				-			

Table2 保育者の信頼感尺度の幼稚園教諭と保育士の比較

	幼稚園教諭	保育士	t値
保育者の信頼感			
専門知識	4.33(.49)	4.08(.53)	2.67 **
子どもへの愛情・楽しみ	4.67(.33)	4.52(.57)	1.79 n.s.
誠実性	4.47(.46)	4.22(.63)	2.51 *
子どもの観察	4.28(.41)	4.11(.56)	1.97 *

*, $p<.05$, **, $p<.01$, ***, $p<.001$

3. 保育者の信頼感と専門性との関連

保育者の信頼感の下位尺度である「専門知識」、「子どもへの愛情・楽しみ」、「誠実性」、「子どもの観察」と保育者の専門性の下位尺度である「自己考慮」、「自己注意」、「子ども分析」、「子ども察知」との関連を検討するために、ピアソンの積率相関係数を幼稚園教諭と保育士別に検討した（Table3）。その結果、幼稚園教諭については、「専門知識」、「子どもへの愛情・楽しみ」、「子ど

もの観察」と「子ども分析」の間で有意な正の相関関係が認められた。保育士については、「専門知識」、「誠実性」と「自己注意」、「子ども分析」、「子ども察知」の間、「子どもへの愛情・楽しみ」、「子どもの観察」と「自己考慮」、「自己注意」、「子ども分析」、「子ども察知」の間に有意な正の相関関係が認められた。

Table3 幼稚園教諭と保育士別による保育者の信頼感と専門性との相関関係

	専門知識		子どもへの愛情・楽しみ		誠実性		子どもの観察	
	幼稚園教諭	保育士	幼稚園教諭	保育士	幼稚園教諭	保育士	幼稚園教諭	保育士
自己考慮	.07	.20	-.03	.28 **	-.11	.14	.09	.30 ***
自己注意	.01	.38 ***	.09	.42 ***	.09	.29 ***	.09	.41 ***
子ども分析	.35 *	.44 ***	.41 **	.44 ***	.20	.33 ***	.34 *	.51 ***
子ども察知	.20	.44 ***	.27	.40 ***	.12	.37 ***	.22	.49 ***

*, $p<.05$, **, $p<.01$, ***, $p<.001$

次に、保育者の専門性が保育者の信頼感をどの程度予測するかを検討するために、保育者の専門性の下位尺度を独立変数、保育者の信頼感の下位尺度を従属変数とする強制投入法による重回帰分析を実施した（Table4）。その結果、幼稚園教諭については、「子ども分析」が「専門知識」、「子どもへの愛情・楽しみ」、「子どもの観察」に対して、正の標準偏回帰係数が有意であった。保育士については、「自己注意」、「子ども分析」、「子ども察知」が「専門知識」に、「自己注意」と「子ども察知」が「子どもへの愛情・楽しみ」に、「子ども察知」が「誠実性」に、「子ども分析」と「子ども察知」が「子どもの観察」に対して、正の標準偏回帰係数が有意であった。

Table4 幼稚園教諭と保育士別による保育者の専門性を独立変数、信頼感を従属変数とした重回帰分析

	専門知識		子どもへの愛情・楽しみ		誠実性		子どもの観察	
	幼稚園教諭	保育士	幼稚園教諭	保育士	幼稚園教諭	保育士	幼稚園教諭	保育士
	β	β	β	β	β	β	β	β
自己考慮	.11	-.15	-.23	-.05	-.38	-.14	-.03	.00
自己注意	-.45	.25 *	-.14	.26 *	.22	.22	-.24	.13
子ども分析	.51 *	.22 *	.54 **	.17	.26	.12	.41 *	.26 *
子ども察知	.12	.25 **	.12	.21 *	-.02	.24 *	.11	.29 **
R ²	.21 *	.27 ***	.25 *	.26 ***	.11	.17 ***	.14	.33 ***

*, $p<.05$, **, $p<.01$, ***, $p<.001$

【考 察】

1. 保育者の信頼感尺度の作成

保育者の信頼感尺度を因子分析した結果、「専門知識」、「子どもへの愛情・楽しみ」、「誠実性」、「子どもの観察」の4因子が見出された。「専門知識」は、保育者としての多様な専門知識を備えているという因子であり、保育者としては必要不可欠であると考えられる。「子どもへの愛情・楽しむ」は、保護者からみたら、保育者が自分の子どもを愛してくれているか、また楽しみを与えているかという因子であり、保護者の思いが現れている因子であると思われる。

「誠実性」は、保護者の立場から、すべての幼児に対して、公平に接しているかという因子であり、保育者の行動としては、非常に重要な項目内容と考えられる。「子どもの観察」は、保育者が日々、子どもの変化をしっかりと観察しているかという因子であり、この因子も保育者にとっては必要不可欠な項目内容であると思われる。

岡本（2015）の保育者がとらえる子どもとの信頼感の研究では、受容・共感、子どもを信じる、子どもとの多様な関わりが信頼関係を構築すると述べている。受容・共感、子どもを信じる、子どもとの多様な関わりについては、本研究の「専門知識」、「子どもへの愛情・楽しみ」、「子どもの観察」の因子に含まれていると考えられる。しかし、「誠実性」については、日常の保育者自身の態度であるため、保育者自身では気づきにくく、保護者である第三者的な見解であるように思われる。また、「子どもの成長・発達を保護者とともに喜んでいる」、「保護者にいつも誠実な態度で接する」など、保護者に対する項目内容もあり、保護者の保育者に対する気持ちがあらわれているように思われる。これらから考えると、保護者が考える保育者の信頼感尺度は、保護者側からの視点で、保護者の多様な考えや思いを含んだ独創的な尺度であると考えられる。

「専門知識」の平均値は4.13、「子どもへの愛情・楽しみ」は4.55、「誠実性」は4.27、「子どもの観察」は4.15であった。各因子とも高い平均値を示していると言える。特に、「子どもへの愛情・楽しみ」については、日常子どもに対して、子どもの成長・発達を考えて、愛情をもって関わっているという項目で

あり、ほとんど保育者が子どもに対するポジティブな思いを持って関わっていると言えるだろう。他の「専門知識」、「誠実性」、「子どもの観察」も平均値が4点を越えており、保育者は子どもとの信頼感を築く行動をとっていると言えるだろう。

項目別に見ると、「子どもに愛情をもって接している」、「子どもの成長・発達を保護者とともに喜んでいる」、「連絡事項だけでなく、園での子どもの様子を保護者に伝えている」、「子どもと話す時は、子どもと同じ目線で話をしている」、「保護者にいつも誠実な態度で接している」の5項目は4.50点以上であり、ほとんどの保育者が日常的に行っていると言えるだろう。反対に、「他の保育者から信頼されている」は3.39点で最も低い得点であった。園の規模、園での様々な人間関係、また保育者としての経験など、多様な視点が考えられるため、今後面接調査などを実施し、詳細に検討していく必要があるだろう。

本研究では、保育者自身が自己評価をしているため、高い平均値になったとも考えられる。今後は、幼稚園教育要領や保育所保育指針に記載されているように、子どもとの信頼感を構築するという保育者行動の重要性を考慮すると、保護者や園長などの第三者における保育者の信頼感行動を評価することも重要と思われる。

2. 保育者の信頼感における幼稚園教諭と保育士の比較

保育者の信頼感尺度の下位尺度である「専門知識」、「子どもへの愛情・楽しみ」、「誠実性」、「子どもの観察」について、幼稚園教諭と保育士の差異を検討した結果、「専門知識」、「誠実性」、「子どもの観察」において、保育士より幼稚園教諭の方が有意に高い得点を示した。渡邊・青山（2018）は、保育者の専門性においては保育士より幼稚園教諭の方が高く、保育者のストレスにおいては幼稚園教諭より保育士の方が高いと述べている。幼稚園教諭より保育士の方が子どもと接する時間は長いと思われるが、仕事の量や質などでストレスを抱えている可能性が考えられる。保育士は多忙のため、専門知識を発揮することが難しかったり、子どもの変化をきちんと観察できないことも考えられる。またストレスを抱えることにより、誠実な判断ができないといった状態になるこ

とも考えられる。渡邊・青山（2018）は専門性とストレスとの間には関連があると述べており、今後は、保育者の信頼感とストレスの間にも関連があることが考えられるため、検討が必要であろう。

3. 幼稚園教諭と保育士別による保育者の専門性と信頼感の関連

保育者の専門性と信頼感の関連を検討するため、保育者の専門性を独立変数、信頼感を従属変数とした重回帰分析を実施した。その結果、幼稚園教諭では、「子ども分析」が「専門知識」、「子どもへの愛情・楽しみ」、「子どもの観察」を予測していた。保育士では、「自己注意」が「専門知識」と「子どもへの愛情・楽しみ」、「子ども分析」が「専門知識」と「子どもの観察」、「子ども察知」が「専門知識」、「子どもへの愛情・楽しみ」、「誠実性」、「子どもの観察」を予測していた。幼稚園教諭と保育士ともに、子どもの将来の成長や長所・短所を考えるなど、日々の子どもの関わりの中で子どもを分析していることが、子どもの信頼感につながると推察される。また、保育士については、保育者自身や子どもの行動に注意を向けることや、子どもの行動を予想することなどが、子どもの信頼感につながると考えられる。これらより、子どもの信頼感を得るためには、保育者が日々、子どもの行動や態度に注意を払うことや、子どもの将来を考えて関わるということが、非常に重要であると思われる。

【まとめと今後の課題】

本研究は、保護者が考える保育者の信頼感尺度を作成し、保育者の信頼感尺度を幼稚園教諭と保育士で比較検討した。また、保育者の専門性と信頼感の関連を検討した。まず、幼児をもつ保護者に対して自由記述により項目を収集し、保育者の信頼感の項目をKJ法により分析した。その後、質問紙調査を実施し、因子分析の結果、「専門知識」、「子どもへの愛情・楽しみ」、「誠実性」、「子どもの観察」の4因子を見出すことができた。4因子の平均値は高く、特に「子どもへの愛情・楽しみ」は高い平均値を示した。次に、保育者の信頼感の4下位尺度について、幼稚園教諭と保育士で比較した結果、「専門知識」、「誠実性」、「子どもの観察」では、保育士より幼稚園教諭の方が高い得点を示

した。次に、保育者の専門性が信頼感を予測するのか検討した結果、幼稚園教諭と保育士ともに、「子ども分析」は「専門知識」,「子どもへの愛情・楽しみ」,「子どもの観察」を予測し、保育士のみ、「自己注意」は「専門知識」,「子どもへの愛情・楽しみ」を,「子ども察知」は「専門知識」,「子どもへの愛情・楽しみ」,「誠実性」,「子どもの観察」を予測した。これらより、保育者が信頼感を獲得するためには、日々子どもの行動や将来のことを考えて関わることの重要性が示唆された。

本研究では、一つの市の公立幼稚園と保育所に調査の依頼をしたため、調査対象者の人数の偏りが見られた。今後は、他市や民間の幼稚園や保育所に調査を依頼し、人数の偏りを修正する必要があるだろう。また本研究では、幼稚園教諭や保育士の勤務年数や年齢を考慮にいれなかった。上村・七木田（2006）や齊木・中川（2008）は勤務年数や年齢により、保育者のストレスは相違があると述べている。西坂・岩立（2004）は勤務年数により、仕事の質が精神的健康に影響を及ぼすことに相違があると述べている。これらより、勤務年数により、保育者の信頼感も相違があることが考えられるため、今後は検討する必要があるだろう。

【引用文献】

- 天貝由美子（1999）. 幼児期における信頼感の発達－信頼できる人・信頼できない人の理解の観点から－ 日本教育心理学会総会発表論文集, 41, 426.
- 天貝由美子（2001）. 信頼感の発達心理学－思春期から老年期に至るまで－ 新曜社
- 榎本真実（2013）. 保護者の教師に対する「信頼感」構築に関する一考察－教師への「メッセージカード」の記述の分析を通して－ 東京家政大学研究紀要, 53, 1-11.
- 飯田都（2002）. 教師の要請が児童の学校適応感に与える影響－児童個々の認知様式に着目して－ 教育心理学研究, 50, 367-376.
- 石隈利紀（1999）. 学校心理学－教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス－ 誠心書房

- 小林正幸・仲田洋子（1997）．学校享受感に及ぼす教師の指導の影響力に関する研究－学校の雰囲気に応じて教師はどうすればよいのか　カウンセリング研究, 30, 207-215.
- 前田健一・佐久間愛恵・新見直子（2008）．中学生の教師信頼感・友人信頼感と学校適応感の関連　広島大学心理学研究, 8, 53-66.
- 村上達也・鈴木高志・坂口奈央・櫻井茂男（2012）．小学生の「担任教師に対する信頼感」尺度の作成　筑波大学心理学研究, 43, 63-69.
- 村上達也・鈴木高志・坂口奈央・櫻井茂男（2013）．小学生における担任教師に対する信頼感と担任教師の行動・態度についての評価の関連　筑波大学心理学研究, 45, 91-100.
- 中井大介・庄司一子（2006）．中学生の教師に対する信頼感とその規定要因　教育心理学研究, 54, 453-463.
- 中井大介・庄司一子（2008）．中学生の教師に対する信頼感と学校適応感との関連　発達心理学研究, 19, 57-68.
- 中井大介・庄司一子（2009）．中学生の教師に対する信頼感と過去の教師との関わり経験との関連　教育心理学研究, 57, 49-61.
- 西坂小百合・岩立京子（2004）．幼稚園教師のストレスと精神的健康に及ぼすハーディネス、ソーシャルサポート、コーピング・スタイルの影響　東京学芸大学紀要第1部門教育科学, 55, 141-149.
- 岡本かおり（2015）．保育者のとらえる子どもとの信頼感　広島大学学習開発学研究, 8, 185-194.
- 大野静一（1997）．学校教育相談とは何か　カウンセリング研究, 30, 160-179.
- 齊木久代・中川香子（2008）．保育職問題評価尺度作成の試み－保育職満足度、ストレス関連反応との関係－　保育士養成研究, 26, 全国保育士養成協議会, 77-86.
- 酒井厚・菅原ますみ・真榮城和美・菅原健介・北村俊則（2002）．中学生の親および親友との信頼関係と学校適応　教育心理学研究, 50, 12-22.
- 佐藤静一・服部正（1993）．学級「集団」・児童「個人」・次元の学級担任教師のPM式指導類型が児童の学校モラルに及ぼす交互作用効果　実験社会心

理学研究, 33, 141-149.

杉村伸一郎・朴信永・若林紀乃（2009）. 保育における省察の構造 幼年教育研究年報, 31, 5-14.

上村眞生・七木田敦（2006）. 保育士が抱える保育上のストレスに関する研究－経験年数及びソーシャルサポートとの関連からの検討－ 広島大学大学院教育学研究科紀要, 55, 391-395.

渡邊賢二・青山奈央（2018）. 保育者のストレスと専門性との関連－幼稚園教諭と保育士との比較より－ 皇學館大学紀要, 56, 39-55.

付記

本論文は第2著者が皇學館大学教育学部に提出した卒業論文を加筆・修正したものです。本研究に協力してくださいました鈴鹿市の教育委員会，幼稚園教諭，保育士のみなさまに深く感謝申し上げます。

Title : Development of a scale of trust in kindergarten and nursery teachers ;
The relationship between trust and specialty of kindergarten and
nursery teachers

Kenji Watanabe (Education Department, Kogakkan University)

Miyu Yada (Utsube Nursery Center in Yokkaichi city)

Abstract

The purpose of this study was to develop of a scale of kindergarten teachers and nursery teachers. As a result, we received four major factors to trust kindergarten teachers and nursery teachers, which are “expert knowledge,” “love and happiness to child,” “good faith” and “observation of child.” Kindergarten teachers showed higher points than nursery teachers in “expert knowledge,” “good faith” and “observation of child.” In kindergarten teachers and nursery teachers, “expert knowledge,” “love and happiness to child” and “observation of child were affected by “analysis of children.” In nursery teachers, “expert knowledge” and “love and happiness to child” were affected by “self-attention.” And “expert knowledge,” “love and happiness to child,” “good faith” and “observation of child” were affected by “sense of children.”

Keywords : trust of kindergarten and nursery teachers, specialty of kindergarten and nursery teachers, kindergarten teachers, nursery teachers